

5 古 代

古代とは遠い昔というだけでなく、この時代の特色は、王または少数の貴族が、はばをきかせていたことにあります。わが国では平安時代までを古代としています。貴族のことを書いた文献はかなりありますが、庶民の資料はいくらもありません。地方の歴史を書こうと思っても資料が少ないので、どうもはつきり書けません。つながりのない断片的なものになってしまうのは、やむをえないことです。

神様の物語

八代に人がいつごろから住んでいたかを考古学によって見てきましたが、こんどは、どんな神話があるかを見ましましょう。

『播磨国風土記』という奈良時代にできた本はよくご存知でしょう。この本にはたぐさんの神話がのせてありますが、わが八代付近では八丈岩山はちしようがんざんと男山おとこやまに関する話が出ています。

「昔、大汝命おほなむらのみことの御子、火明命ほあかりのみことは心も行ないも大変荒っぽい神でした。そうしたこ

とから父神のオオナムチは心配なさつて、息子むすこのホアカリを捨てて逃げようと思われました。父神は船で因達いたてかみやま神山（八丈岩山）にやってきました、その子に水を汲みにやらせ、まだ帰らないうちに船をだして逃げ去りました。

まもなく息子むすこのホアカリが水を汲んで帰ってきて、船が出ていくのを見て大変怒りました。そこで波風を起こし、父神ちちがみの船に追いせまりました。父神の船は進めません。ついに難破なんぱしました。

▲『巨神と英雄の故郷』より

船が難破したところを船丘(景福寺山)、琴が落ちたところを琴神丘(薬師山)、蚕が落ちたところを日女道丘(姫山)、管が落ちたところを管丘(男山)と名づけました。」

管の落ちた所は、よく分からないという学者がありますが、男山だろうという学者もあるのです、ここではそうしておきましょう。というのは『播磨国風土記』は非常に簡単な文章で、地名も今とは変わってしまった所があるからです。また管丘も箱丘と、ちがった字で書いてあるなどして、研究には苦労がいらいます。

播磨国飴磨郡 私たちの住んでいる所は兵庫
因達里 庫県姫路市八代〇〇町です。

兵庫県姫路市というようになったのは明治二十二年からのこと、姫路市八代になったのは大正十四年から、八代〇〇町は昭和二十四年からのことです。

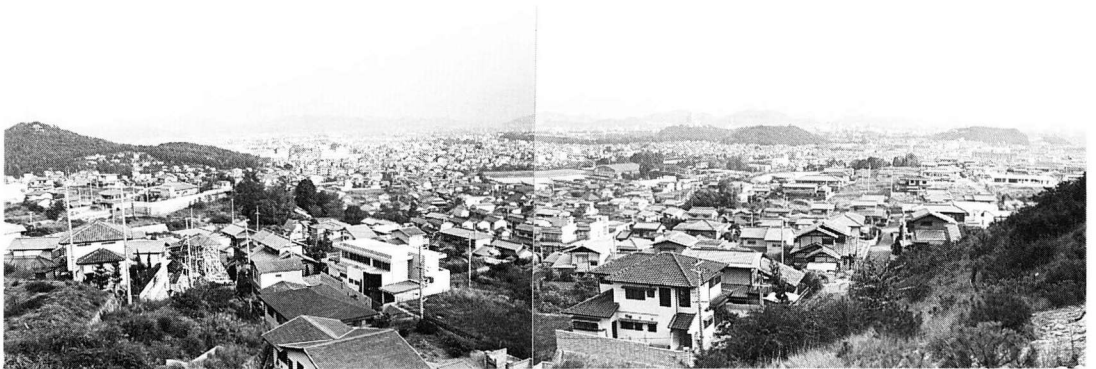
では、もつと昔はどうだったのでしょうか。千二百年以上も前の大化の改新のときにさかのぼりますが、そのころから私た

船丘↓
(景福寺山)

管丘↓
(男山)

日女道丘↓
(姫山)

芝崎山↓



新在家本町六丁目、八丈岩山の東斜面からの展望

▲ 因達神山から見た因達の里

(昭五二・九 矢内写)

船丘、管丘、日女道丘は伊和の里に属する。そこから左(北)一帯が因達の里だとかんがえられている。いまは家で埋まってしまった。

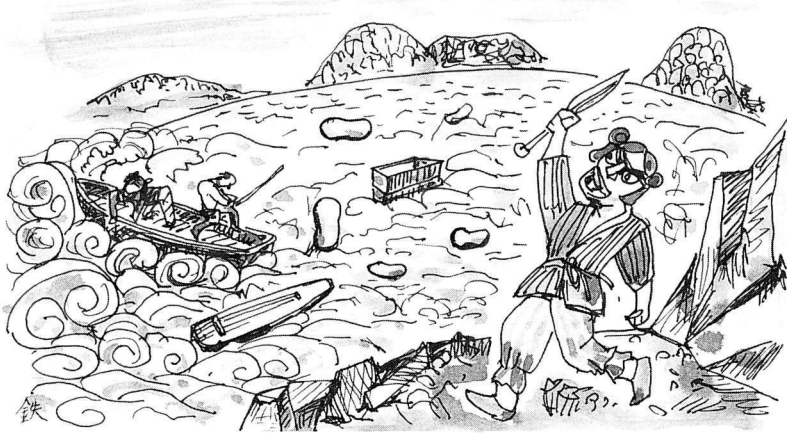
この地方は播磨の国と名づけられました。国の中は郡に分けました。姫路付近は鎭磨郡です。郡の中は里、鎭磨郡は十八の里に分けられました。

八代という地名は、その頃まだないので、今の八代はどの里にあったのでしょうか。これが、なかなかむつかしい問題なのです。『播磨国風土記』の因達神山（八丈岩山）のことは前項でみましたが、この神山が解決の糸口になりそうです。

十八の里のうちの因達の里は因達神山の近くにあるはず。ところが神山の西は今は安室ですが、昔は韓室の里であったらしい。南は伊和の里。だから因達の里は、山より東であるはず、ということになります。

だが八丈岩山より東にある里で、かなりよくわかる里は枚野里——今の北平野あたりと、大野里——今の野里あたりがあります。ですから因達の里は今の新在家・伊伝居・八代・坊主町・シロトピア記念公園あたり

一帯だろうと考えられるのです。



播磨 大化改新より前は針間と書いていた。

鎭磨 昔はこの字をよくかいていた。明治二九年から飾磨に統一した。

因達里 J R 姫路駅の南東、北条・南条あたりだという説もある。しかしここには因達神山に相当する山がない。

条里制

姫路付近の地図を見ると東西の道は右さがりになっています。よく

見ると南北の道は、それと直角に交わっています。なぜこんな道になっているのでしょうか。多くの学者の研究の結果、千二百年以上も前の大化の改新のころ、平野を碁盤目に区切った跡だということが分かってきました。当時の尺で六町（六五四）四方に区切り、東西の並びを一条、二条、三条…、南北の並びを一里、二里、三里…と呼びました。それを条里制といいます。

それが北は山形県から南は鹿児島県まで、ほとんどの平野がそうなっています。ただし、この区切る工事は郡ごとにおこなったので、道の方向は郡ごとに異なっています。平野の中を碁盤目に道をつけて区切るのは今の土地区画整理事業にあたるもので、たいへんな工事だったでしょう。長い年月かかったことでしょうが、そのようすは、書いたものがないのでよく分かっていません。しかし何条何里で場所を示すことができる

ので便利になりました。

鰯磨郡の条里

姫路市は鰯磨郡に属していたことは前にのべました。

鰯磨郡の条里は東に約二〇度かたむいてるのが第一の特色です。なぜ傾けてあるのでしょうか。それは市川という大きな川が北東から南西へ流れていたため、この流れの方向に南北の道をきめ、それと直角に東西の道をきめたからだと考えられています。

折込地図には右一条、右二条…という呼びかたになっています。これが鰯磨郡の条里の第二の特色です。これは今の総社あたりに国府があったらしいので、国府から西を右、東を左としたようです。奈良の都が朱雀大路を境にして西を右京、東を左京としたのと同じです。

南北の呼び名は、里でなく坊になっています。これは鰯磨郡だけでなく、播磨全体がそうしてあります。ふしぎなことです。それで播磨は条坊制だともいいます。

条里の傾き

傾きは二〇度ともいう。どちらが正しいか、もういちど測りなおしてみることが必要だ。

仁厚山南方の平野では、九・五度になっている。

八代付近の条里

では八代付近で条里が残
っているところを空中写

真（折込図）でさがしてみましよう。すぐ目

にはいるのは、姫路短大の南方と、西高校

の北の方です。八代新道にも少しあるよう

です。中央部には見られませんが、これは、

このあたりが昔は市川だったことを物語っ

ています。水が流れ、河原もあるなどして、

四角に区切ることができなかつたからです。

短大の正門前がいちばんはつきりしてい

る所なので、ここを基準にして条里区画を

赤線で引いてみました。そうすると洪水で

埋まったであろう水路も、条里方向に復旧

したところが見えてきました。後世あらた

に作った道も条里方向になっているのが見

えます。

姫路城北側の坊主町あたりの中濠や土壘

も条里にそって作ってあるようです。これ

は池田輝政が城を作るときまで条里地割り

が、このあたりにも残っていたからではな

八代新道は右一条十三坊、南八代は右二
条十二坊といったようです。

六ノ坪の謎

135 Pの字の地図を見ると、短

大の正門前に六ノ坪がありま

す。それを空中写真に重ねると、南北二町

になります。広い道の西は南新在家、そこ

の字限図にも南北二町にわたって六ノ坪が

あるのです。その範囲は（折込図）に表した

ように、東西南北とも二町四方になります。

ところが条里制という坪とは、第一図で見

るように一町（一〇九坪）四方です。それな

のに、ここは二町四方、これはどういうこ

とでしょうか。

それは三十六ノ坪の三十を省いて、いい

やすいようにしたものです。短大正門前の

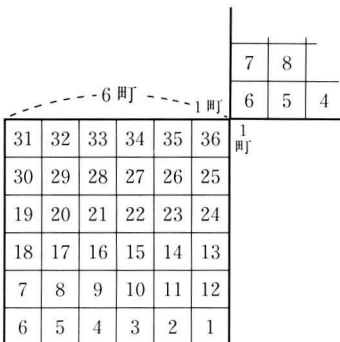
一町四方を三十六ノ坪だとすると、その南

西は二十六ノ坪であるはずです。この二十

も省略され、このあたり二町四方を、いつ

の頃からか六ノ坪というようになったので

第一図 坪の並び方



短大構内南東部にも六ノ坪があつて南からつづいていきます。これはどういうことでしょうか。

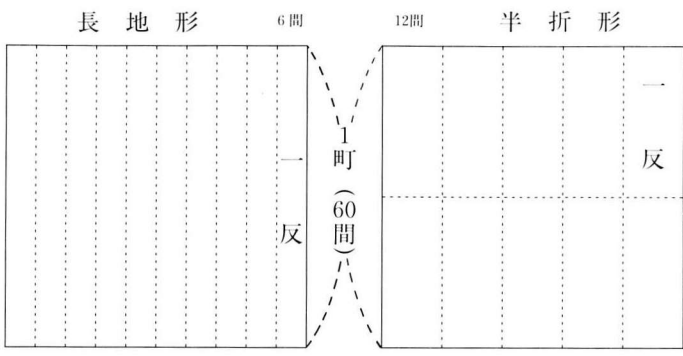
そこで第一図を見ると、坪の位置関係がわかります。三十六ノ坪の右上には隣の条の六ノ坪があることになっています。本来「六」という数字のつく地名が斜に三つ連なっていたのですが、それでは形が悪いし、面積もせまいので、明治初期に字を整理したとき「六ノ坪」を西へ移し、南の方とひとまとめにしたのではないかと考えます。坪の名が、もとの位置から移動している例は他にもよくあることです。

坪の中は 一町四方の坪の中は、十の田に区切ります。一つの田は一反で、す。その区切り方は第二図のように二種あります。これは日本中どこでも同じです。短大の南では、この二つの区切りが見えます。口絵の空中写真を見ると、この田の形にしたがつて家が建ったので、条里の形をよく残した家並みになっているでしょう。

これは珍しい景観です。

「私の家は南向きだ」と思っている、いやや西向きになっています。夏の朝、北の窓から日がさしこんでくるのはそのためです。千二百年も前につくった条里制が、いまなお私たちの生活に影響しているのです。

第二図 坪の中の田の地割



布目瓦が

昭和三十三年六月三日、南八代

見つかる

町の木村病院建設場で、布目瓦

の破片が一つ見つかりました(写真上)。写真の表面に八代宮跡と書いてあるのは、発見者が当時そこを字宮跡だと思ったからでした。135Pの地図でわかるように、そこは字深田で、発見者中浜君自身あとで訂正しています。

この瓦は灰色の堅い焼きで、凸面は斜格子文を、凹面は布目が少し残る程度に消えています。

もう一つ(写真下)は昭和三十六年八月、

姫高体育館予定地を発掘したとき見つかりました。写真で見ると両面とも少し消し、ヘラのあととも前のものと似ています。

出てきた所は違っていても、この二つは手法がよく似ているから、同じ人が作ったのではないのでしょうか。二つともタテヨコ一〇の小さいものです。布目瓦がザクザク出てくる所は付近にはないので、どこからか運ばれてきたのでしょうか。

布目瓦は八代では東光寺山で昭和三年二月、島田清氏が破片一コ発見しています。

この山に、古代にお堂でもあったのかと想像したこともありましたが、その後は瓦が出たことを聞かないので、なんともいえません。

深田の瓦

『八代深田遺跡』姫路市教育委員

会発行

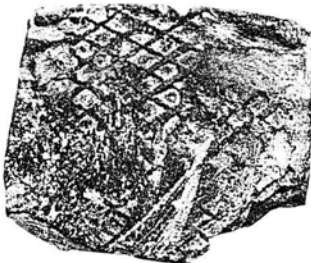
瓦の写真、拓本、特徴がのせてある。



木村病院出土瓦凸面



同上凹面



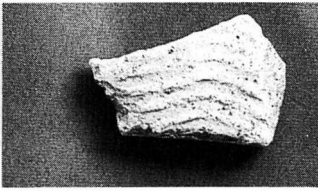
姫高体育館出土瓦凸面



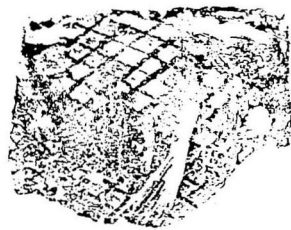
同上凹面

瓦の出土地で近いのは、姫路短大の西、新在家本町三丁目3番32号の付近、六七二番地の一です。昭和六十三年八月、田中敏博氏が自宅への道に下水管を通したとき、地下一メートル掘って積み上げられた土の中から見つけました。この瓦は奈良時代末か平安時代初めのものようです。こまかい布目がはっきりついています。

でてきた瓦を写真にとったり、拓本たっほんにしたりしておくと、やがては深田の瓦が、どこから運ばれてきたか分かる 때가くるでしょう。



▲新在家本町三丁目出土の瓦



0 5 10cm

東光寺山の瓦

『断金』二九 姫路師範学校発行

新在家本町三丁目の瓦

『文化財だより』二二 姫路市文化財保護協会発行
出土状況や瓦の写真ものせてある

上 木村病院 下 姫高体育館出土瓦の拓影

石器時代—古代年表

	〈八代のできごと〉	〈社会のできごと〉
石器時代	芝崎山で石槍が採集されている。	1万年まえ今の日本列島 ができあがる
縄文時代	芝崎山で石矢じりが採集されている。	
弥生時代	深田遺跡（南八代町）が発掘調査された。 富士才遺跡（八代新道）が発見された。	239ヒミコが中国に使いを 送る
古墳時代	芝崎山など八代の山に古墳が造られた。 深田遺跡でもこの時代のものが出土している。 条里制がしかれ、六ノ坪（短大の南）の地名がある。	大和朝廷ができはじめる
奈良時代	八代付近は因達里に属したようだ。	播磨国風土記ができ里の 名が載せてある
平安時代	八代付近は国衙領に属した。 白河法皇が東光寺をご建立という。	